

私が通った幼稚園・保育園 (11)

思い出の私と記憶の中のわたし

富士原 紀絵

幼稚園の思い出、と言われて自分で正確に想起できる記憶というのはほんの僅かしかない。にもかかわらず、幼稚園時代の自分の様子、自分の巻き起こしたハプニングは数多く知っている。それというのも、成長してから、自分の親のみならず、幼稚園の担任だった先生や友人、友人の親に「幼稚園の時のあなたはこういう子ども

だった」、あの時起こした事件は大変だった」という話を数多く聞かされてきたからである。

私の出身地は宮城県登米郡迫町佐沼という岩手との県境近くの半農半商の片田舎で、人の移動もほとんどなく、幼稚園から高等学校の間、ほとんどメンバーが変わらない（つまり、通うことのできる学校がそこしかない

い」という、現在住んでいる東京からみれば想像もつかない狭いコミュニティの中で育った。狭いコミュニティゆえ、成長してからも幼稚園の担任の先生とのつながりが途切れることはなかった。

例えば、小学校六年生の時、町内六小学校の合同陸上競技大会の校内出場選手に選ばれ、放課後、校庭で練習をしていた際、偶然通りかかった幼稚園時代の担任の先生が、私の姿を見、ことの経緯を聞き、「同級生の中では一番ちびっこでいっつも泣いてばかりいた、あのきえちゃんがねえ、本当に泣かない日は一日もなかったのよ……」と泣いて涙ぐんでいた姿は今でも忘れられない。これは、幼稚園時代の私は全く運動に向く体格でもなく、厳しいトレーニングに耐えうる根性もない子どもだったことを意味しているのだろう。先生が思わず涙ぐむほど頼りない子どもだったということである。

こうした情報を成長してから度々インプットされることで、自分の経験した幼稚園時代の出来事や自分の園児

像が作られてしまっている。あまりにも多すぎて、自分が本当に覚えていることが何であるのか正直よくわからない。あたかも自分自身が記憶したもののようすり替わってしまったものの方が多いのかもしれない。

しかし、そうして作られたであろう幼稚園時代の私の思い出は、それだけ町の多くの人に見守られて育ったということでもあり、今ではたくさんの思い出があることに感謝している。

記憶している二つの事件

その一：お弁当購入事件

園児時代の私を知る人によつて教えられた「思い出」の方が恐らく多い中で、確実に自分の印象に残っている記憶が二つある。一つは「お弁当購入事件」（園児の私にとっては大事件だった）、もう一つは「お雛様折り紙事件」である。自分の母親に覚えているか聞くと、両方とも何らかの形で関与していたにもかかわらず、私に

とつてのこの「大事件」を覚えていないそうである。

お弁当購入事件は、現在の私の金銭感覚を養う上で、きつと大きな役割を果たしたに違いない事件である。私の通っていた幼稚園ではお弁当持参が原則であったが、年長になると親からお金を預かり、パンを購入してお弁当代わりにすることができた。朝、先生が注文を聞き、集金するというシステムだった。私が初めてパン購入を行うことになった日のことである。お金を自分でもつ、という経験がそれまで全くなかったため、どきどきわくわくして先生の前に列を作って並んでいた。ところが、自分の番が近づき、お金を入れた袋（だったかどうかは定かでない）の中を確認すると、十円足りない。慌てて通園バックの中をどんなに奥まで、ひっくりかえして探してみてもでてこない。あまりのショック（この時のショックは、このままではパンを購入できずお昼を食べることができないというショックだったのか、お金が無いという事態そのものに対するショックだったのかは覚

えていない）にぐずり泣き出してしまった。その時、である。大の仲良しのトモコちゃんが私のところにきて、事情を聞き出し（恐らく聞き出すのも大変だっただろう）「十円あるからあげる」と言ってくれたのである。

お金をもらう、ということに何の罪悪感もなく、その好意を一点の疑いもなく受けとった私は、よろこんでその十円を片手にぎっちり握りしめ、少し遅れて先生のところに注文に駆け寄った。まずは袋の中からお金を出した。その後、手の中から十円を出した。すると、先生が「なんで十円はこっちの手から出したの？」と聞いてきたのである。私は「十円なかったからトモコちゃんにもらった」と言った。すると、先生の表情が一変した。トモコちゃんも呼び出し、私たちから事情を聞いた後、先ず私がものすごく怒られた。「お金が足りなかったんだったら、なんで先生に言わないの?」。次にトモコちゃんが怒られた。「勝手に人にお金をあげてはだめでしょう?」。その後、他の組の先生方も集まり、しばら

くの間、私とトモコちゃんの目の前で、話し合いを始めたのである。私はその状況がなんだかとても怖くて、その日の昼は結局購入できたパンも全く手を付けることなく、帰る時までずっと泣きじゃくっていたことを覚えている。

この時の経験がかなり根深いものだったので、小学校高学年になると、百円、二百円程度の貸し借りは、友人間で当たり前になされていたが、私はどんな微々たる金額であっても、決して友だちからお金を借りる（どこかの時点で「もらう」が「借りる」にすり替わっている）ことはなかった。現在もそうで、金額の多少にかかわらず、たとえ十円でもお金を借りるという行為に非常に恐怖感があり、抵抗感があるのはこの時の経



験がもとにあるのではないかと思っている。これが有り難い経験だったかどうかはわからないが……。

その二：お雛様折り紙事件

もう一つの「お雛様折り紙事件」は、やはり年長の時の出来事である。園を挙げての雛祭りに向けて、一人ずつ画用紙にお内裏様とお雛様を折り紙で折って貼り付け、並べて掲示する、という作業に取りかかった。全員、お内裏様は青の折り紙で、お雛様は赤の折り紙で折るように言われ、折り紙が渡された。その時、私一人だけが、お内裏様はなぜ青の折り紙でなければならぬのかと猛然と抵抗した。なぜか。今で言う「ジェンダー」に対する無意識の抵抗といった高尚な感覚であるはずはない。お雛様を赤い折り紙で折ることに抵抗しなかったのであるから。とにかく、お内裏様が青というのが許せなかった。先生は「みんなと一緒」ということを強調したが、私は絶対嫌だといえなく、それでも、無理に

手渡された折り紙を折り始めたが、涙と鼻水でぐしょぐしょになり、何枚も何枚も折りなおしているうちに、教室から青の折り紙が無くなってしまった。それで、結局、私の希望する紫色の折り紙でお内裏様を折ることができたのである。私がなぜ紫色のお内裏様にそれほどまでにこだわったのか。それは自分の家にあるお雛様がその理由であったのだと思う。自宅のお内裏様は、紫色の衣装を付けていたのである。きつと、私は「私のお内裏様」を再現したかったのだと思う。

私は「私のお雛様」を作成できたことに大満足し、雛祭り当日も、赤と青で整然と並んで掲げられた折り紙お雛様の中に、たった一つの紫色のお内裏様を発見し、意気揚々と母親の手を引いて、見せに行つたのだ。すると、先に見に来ていた親たちが、私の母親を見、「きえちゃんのだけ、みんなと違うのよ」と指さして話題にしていた。先生は私の母親に謝っていた。私は先生がなぜ母親に謝っているのか、その理由が全くわからなかつ

た。しかも、母親の方も頭を下げており、お互いに謝っているその様子がとても不思議で仕方なかった。母親からは「私らしいけれども、これからはみんなと一緒にしなければだめよ」といったニュアンスのことを言われた。一応できはほめてもらえたものの、他の母親達に笑われた上に、母親も一緒になって笑っていたが、その笑いがとても寂しそだった。その寂し笑いの表情をとっても鮮明に覚えている。そこで私は「なんでもみんなと一緒にであらねばならない」ということを学んでしまった。

現在の都会でならば、むしろ個性的であることが尊ばれるであろうが、今から三十年前、東北の閉じた田舎で生きていく上では、むしろ没個性的であらねば生き難かった。できるだけ周囲から浮いた存在にならないことが重要だったのである。強烈な自己表現をする子はいたが、「変わり者」として幼稚園でも、小学校に入学してからも仲間はずれにされていた。私の場合、恐らくこの時の経験が、人に笑われたいためには、周囲と完全に同

調しなげなければならないという感覚を初めて自覚したのだったと思う。その後も没個性的に小学校・中学校・高校時代を無難に過ごしてきた私が、「自己表現」、「自己主張」という行為を是として受け入れるまでにはとてつもなく長い時間がかかったのである。

それでも楽しい幼稚園の思い出

幼稚園時代のたった二つの鮮明な記憶が辛いもので、担任の先生や友人の親の言うとおり、私が泣かない日が一日もなかったのが事実だったとすると、まるで暗黒の幼稚園時代だったように思われるかもしれない。

しかし、母親曰く、私は幼稚園に行くのが嫌だと一度も言ったことはなかったそうである。成長してから通園路を通った時に、その路沿いに住むおばさんにも、私は幼稚園に行く道でも、帰り道でも、いつも大声で流行の歌謡曲を歌っていてそれは上機嫌だったと聞かされた。友人からも、私はやりたい放題だったよな（なんでも、

しょっちゅう小物を壊していたそうである）と聞かされる。やりたい放題だったために怒られたり、我慢しなければならぬ時に堪えられなかったりで、泣いてばかりいたのだろう。私の記憶にはないが、周囲の人から見た私は、どうやらとても充実した楽しい幼稚園時代を過ごしていたらしい。自分の記憶に残った出来事は、恐らく現在の私の行為や行動にも少なからぬ影響があるのは確かそうだな、と思っている（思いこんでいるだけかもしれないが）。でも、周囲の人の思い出の中の私も、きっと覚えている人からみれば、現在の私と繋がっているのだろう。記憶の中のわたしも、思い出の私も、そのいずれもが今の私の基礎となっているに違いない。そしてなによりも、卒園してしばらくたってからも、私の幼稚園時代の思い出を有してくれる人がいることに、つくづく感謝したいと思う。

（お茶の水女子大学）